

<前回>自然主義とキリスト教

0. 17世紀のイギリスの状況 → 近代社会の母体

科学革命の世紀＝近代科学誕生の世紀。政治的また経済的な混乱の世紀。

17世紀イギリスの争点

政治：絶対王制／共和制、ピューリタン革命と王政復古、名誉革命、王党派と議会派

経済：封建的経済秩序／資本主義・市場経済

宗教：イギリス国教会／ピューリタン右派から中間派、そして左派

1. 16世紀のイギリス宗教改革の特性とその歴史的展開。

上からの宗教改革、カトリックとプロテスタントの中間（中道あるいは中途半端）

(1) 科学革命と政治・キリスト教

2. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

3. 穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。

(2) ニュートンとニュートン主義の自然神学

4. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

5. ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌

自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈

7. 『プリンキピア』の神学

①パントクラトルあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調

②無神論論駁のための神の存在論証

「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない。」(ibid., p.760)

伝統的な自然神学における「意図（デザイン）からの神の存在論証」

③自然哲学とその神学的根拠

自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。

9. イデオロギーとしての自然神学・自然科学。デザイン神学(Design Theology)

1) 世界における見事な秩序・法則＝デザイン

2) 偶然ではない

3) デザイナーとしての神の存在

(3) 18世紀と聖俗革命

11. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

村上陽一郎の「聖俗革命」：「神—世界—人間」→「世界—人間」

12. 「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。

諸科学・諸学問のモデル＝近代的知のモデル。

↓

自然主義

(4) 啓蒙主義の帰結

15. 宗教の私事化：宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立→「政教分離」システムと信教の自由（宗教的寛容）

→公共の領域を私的な事柄（宗教、道徳、経済）の対立から切り離す。宗教を私的なものとして位置付けられる（私事化）。

16. 理神論(Deism)：キリスト教思想の合理化

17. 歴史主義と自然主義：近代的知における知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化→自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱。

・思惟の歴史化（思惟の歴史性の自覚）

自然法的な超歴史的思惟 → 歴史主義

・超自然主義批判としての自然主義

超自然主義 → 自然主義

（補論）ヒック宗教哲学の基本構想

A. 宗教概念

宗教史・宗教現象→基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換

ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性

B. 宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論

自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、

宇宙的楽観主義、還元主義批判

神の存在論証と悪論・神義論

宗教言語論→宗教的実在論

C. 宗教的多元性：宗教的状况の現代

多元性と実在→ the Real

キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

<宗教言語と宗教的実在論> Bについてのヒックの議論のまとめ

1. 『人はいかにして神に出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館

・ The principle of critical trust

「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きている暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを目指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみて、夢で見た経験は思い違いであった——夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので——と考えなおすだろう。」(107-108)

「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」(108)

「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」(109)

6. 歴史主義とキリスト教

(1) 近代と歴史的精神

1. 自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向（因果律の二つのタイプ）

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学／精神科学、説明／理解

2. 「近代」と人間的現実の歴史化

現実には永遠不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は、メッサニーが言う「自然」からの「自由」という性格をもっていることに、われわれは注目せねばならない。つまりそれは「自然」から「自由」へという変化、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程でもある。」(大木、上、47)

「四つの相における近代化」「①工業化、②都市化、③民主化、④情報化」(55-60)、「真理から情報へ、これは、真理の歴史化と言ってよい。真理は永遠ではない。」(58)

「近代化の深層構造」「①非魔術化・合理化」「②自由化としての近代化」(60-63)、「コスモス」から「歴史」へという《歴史化》が、われわれの歴史神学の座となる。」(62)

3. プロセスとしての自然(外となる自然と自然本性) = 自然史

「自然史の観念は直接的には自然という言葉の十八世紀的用法から起こった」、「種々の事物——物質界、有機体的生命、理念、制度といった——の「自然史」を明らかにすること、これが十八世紀後半、西ヨーロッパのきわめて多くの哲学者たちの目標であった。」(ニスベット、194)。

「この方法の固有なものは、当面の研究に関する「世論や制度の起源を、いわゆる人間的自然の原理や社会の環境から導き出すことである。なかでもとりわけ重要なのは、人間の歴史の自然的行程、つまり人間がこれまでたどってきて、この先も「偶然」や「干渉」が定められた進路……から逸脱させないかぎり、たどっていくはずの行程を明らかにする、叙述の構成である。」(210-211)

「十八世紀における進歩の理念や自然史の理論から、十九世紀における社会進化論の諸相に至るまでの距離は、ごくわずかである。二つの世紀にみられる「進歩」、「発展」、「進展」、「自然史」といった言葉は、ほとんど相互に交換することができた。」(214)

ルソー『人間不平等起源論』(1755)、アダム・スミス『諸国民の富』(1776)、ヒューム『宗教の自然史』(1757)

cf. 18世紀：博物学・自然誌
分類と系統

4. 「歴史主義」の多義性あるいは混乱

歴史主義という用語は、様々な視点から様々な意味を賦与させて使用されている。特に、ポパーとのほかの論者との相違。

「歴史主義」「その悪しき側面から完全に引き離され、人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化という意味において理解されねばならない」、「しかし、この歴史主義に対して、自然主義が同様に原理的かつ包括的な仕方で対立している」(トレルチ、諸問題・上、158)、「自然主義は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則化の連関として、またそのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されなければならない」、「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世にも知られていないものであった」(159)、「近代的思惟一般が持っている二つの本質的動機」(164)。

5. 存在レベルにおける歴史・歴史化(存在論的概念)

- ・人間存在の歴史性
- ・聖書的な歴史的思惟(聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味)

聖書的人格主義とギリシヤ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった

対比。

- ・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

6. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

↓

価値や理想の妥当性はそれが形成生成してきた歴史的連関(文脈)の範囲内に限定される。この限界を超えた普遍化は不可能あるいは間違っている。といった認識あるいは感覚。

相対性の意識=歴史相対主義→ニヒリズム

「この時代の激動は、倫理学の崩壊をももたらした」(大木、1)、「相対主義の克服とは、相対主義が文化ニヒリズムへと転落する道とは逆の方向を模索することであり、崩落に身を委ねるのではなく上昇の意志をもつことである」、「今日の知的課題は、倫理学の建設である」、「相対的状况を十分知りながら、なお倫理学が倫理学として必然的に求めるべき普遍的な当為を探究する一つの企てがなされる。」(2)

「自然主義は無制限に、あらゆる生活のものすごい自然主義化と荒涼化へと導き、歴史主義はあの相対主義的懐疑に導く」、「歴史的なものの認識可能性と意味とに対する相対主義的な価値的懐疑であり疑惑である」、「これら悪い副次的な意味」、「歴史的素材を使いこなす文化総合へと向かう勇気をふるい起こす歴史哲学を求めている。」(トレルチ、165)

7. 争点：ニヒリズムそして倫理学

決疑論か状況倫理か

8. H・R・ニーバー『啓示の意味』

9. 抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→ 経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的实在論。

(2) 歴史的思考法と聖書学

10. 「教会的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教会的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想(佐藤、169)、シュライアマハー、リッチェルの線上。

11. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

- ・批判(Kritik) ・類推(Analogie) ・相互作用(Wechselwirkung) あるいは相関(Korrelation)

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的的事象間に生ずる連関がそれである。」(10)、「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)、「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものとの関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

12. パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

13. 「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かったの歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化されて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」(イッガース、13)

・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」(16)、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」(20)、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」(21)。

「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進さえしたということなのである」(26)、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。

↓

民衆史、心性史 (アナル学派)

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987年。

(3) 歴史主義の諸問題

14. 歴史主義と歴史相対主義

近代＝実在・現実の歴史化 (大木英夫『新しい共同体の倫理 <基礎編 上下>』教文館)

歴史の多義性

↓

15. キリスト教の絶対性 (普遍史) からヨーロッパ的文化総合へ

・1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte

「救済宗教」 「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」(199)

↓

・1922: Der Historismus und Seine Probleme, 「ヨーロッパ主義」 (Der Europasimus)

Q :

- 1) 歴史相対主義はニヒリズムか? cf. H.R.ニーバー (『啓示の意味』)、パネンベルク
- 2) 普遍性とは何か? 普遍性と個別性とは単純に対立的か? 歴史内部で可能な普遍とは?

<参考文献1>

1. トレルチ『歴史主義とその諸問題 上中下』(トレルチ著作集4~6)、ヨルダン社。
『歴史主義とその克服』理想社。
2. C・アントーニ『歴史主義』創文社。
3. F・マイネッケ『歴史主義の成立 上下』筑摩書房。
4. K・ホイシー『歴史主義の危機』イザラ書房。
5. K・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社。
6. カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』恒星社厚生閣。
7. 田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院。
8. コリンウッド『歴史哲学の本質と目的』未来社。
9. リクール『歴史と物語 I II III』新曜社。
『記憶・歴史・忘却 上下』新曜社。
10. E・H・カー『歴史とは何か』岩波新書。
11. ゲオルク・G・イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
12. H・R・ニーバー『啓示の意味』教文館。
H. Richard Niebuhr, *The Meaning of Revelation*, Macmillan, 1941.
13. 大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎論 上下』教文館。
14. 大林浩『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。
15. その他
カール・レーヴィット『歴史の意味』未来社。
ニスベット『歴史とメタファー 社会変化の諸相』紀伊國屋書店。
アルフレート・シュミット『歴史と構造 マルクス主義歴史認識論の諸問題』
法政大学出版局。
ポール・ヴェーヌ『差異の目録 新しい歴史のために』法政大学出版局。
ドミニク・ラカブラ『歴史と批評』平凡社。
アーサー・C・ダント『物語としての歴史 歴史の分析哲学』国文社。
ジャック・ル・ゴフ『歴史と記憶』法政大学出版局。

<参考文献2>

1. 『聖書講座』(第一、二、三、四巻。特に今回の講義に関連しては、第一、四巻)
日本基督教団出版局、1965年。
2. P・シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
3. 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年。
4. トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集2』
ヨルダン社。
5. パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
6. A・シュヴァイツァー『シュヴァイツァー著作集』白水社。
第十七、十八、十九巻『イエス伝研究史 上中下』(遠藤彰、森田雄三郎訳)
・賀川豊彦『基督伝論争史』警醒社、1913年。
第一篇がシュヴァイツァーの『イエス伝研究史』の抄訳。